保育者養成機関における男子学生への声楽指導の在り方

保育科　鈴　木　慎一朗

1．研究の目的

本研究の目的は，保育者養成機関での声楽学習における男子学生が抱える課題を指摘し，それを解決するための教育内容と方法を検討することである。本研究では，声楽学習に取り組んでいる男子学生の姿をたどり，彼らがどのような意識を抱いていたかについて考察した。実践の考察を行う際には，学生の授業感想，教師メモ，授業記録，映像資料，アンケート調査結果を用いた。事例は以下の通りである。

- 2006年度白梅学園短期大学保育科第2学年対象の「音楽Ⅱ（声楽）」（通年30回，全受講生123名。1クラス31名程度）
- 抽出対象：男子学生全3名（学生A，学生B，学生C。学生Aと学生Bは同じクラスで受講）

2．研究の成果

4月当初，「男の子一人なので歌う時に少し恥ずかしいし，歌いづらい」と訴えていた学生Cですら，積極的に歌うようになってきた。10月18日の授業感想には，「学園歌と《Santa Lucia》を歌うのが楽しみです。廊下などでもついつい口ずさんでしまうほどです」と記している。

また，筆者が9月27日の授業の最後に「次回は《Santa Lucia》を歌うよ」と予告した途端，学生Bは「先生，高校で《Santa Lucia》をやったことがあります」と言い，他の学生の前で独唱し始めた。

その他，イタリア語の歌に抵抗を感じていた学生Aについても「慣れれば皆ずいぶんスムーズに歌えていた」（12月20日授業感想）と自分たちの演奏に対し満足しながら振り返っている。

図1は，通年30回の授業終了後，男子学生と一緒に受講した女子学生54名から得たアンケート調査結果である。クラスの中に男子学生がいたことに対して否定的な感想を持った女子学生は，9％と限られていた。肯定的な感想を持った理由として「合唱の際，男性の声があると仕上がりも楽しい」「男性の声があるというのは面白くて，歌っていて楽しかったから」等が挙がっている。

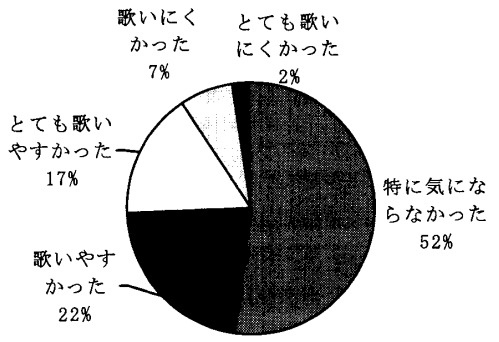

図1　「クラスの中に男子学生がいたことについて」（2007年2月7日）

一方，男子学生の一人からは，「自分の歌に自信がないので男声が目立つのはやりにくかった。けど，楽しく歌えました」という回答があった（2007年2月7日実施アンケート調査）。しかし，その直後彼らと対話したところ，「4月当初は，歌いにくいとすごく感じたけれども，だんだん慣れてきました」と肯定的な反応を得た。また，表1に示したように，学生A，学生Bが，自分の声について「好き」と回答し，自分の声に自信を持ち始めた。

表1　自分の声について

	学生A	学生B	学生C
4月5日	ふつう	嫌い	調査の日，欠席
2月7日	好き	好き	分からない

以上，女子学生が大部分を占める保育者養成機関において，男子学生の表現意欲を高めるという点では，本実践は有効に働いた。今後，配慮すべき点は，以下の通りである。

・クラス編成をする際，学籍番号順番等機械的に振り分けるのではなく，男子学生については1つのクラスに固める方がよい。

なお，本実践は筆者の短期大学での初年度の実践であるだけに課題も多い。今後，さらに研鑽を積んでいきたい。

言語連想における時代的変化の検討
── 幼児について ──

短大　心理学科　荻　野　七　重

言語連想について，その反応後を品詞によって分類し，発達的変化を検討した研究がアメリカの研究者によって行われ，英語では刺激語と異質な反応語が年齢の増加に伴って減少し，等質な反応語が増加することが確かめられた。荻野・小杉は，日本の幼児，小学生，中学生を対象として，一連の研究を行い，この発達的変化の傾向は日本語においても同様であることを確認している。

これらの研究は1970年代を中心に行われてきた。そこで，このたびは，ほぼ30年という時間的経過の中で，反応語の持つこれらの傾向がどの程度不変的なものであるか，性差については変化がないか，また，どのような反応後の内容的変化が認められるかを検討することを目的として実験的研究を行いたいと考えた。

そのために，2006年度は，幼児のみを対象として，連想実験を行うことを計画した。

実験は，10月～11月を実施時期と考えていたが，都合により，2007年1月・2月に行った。

連想実験の内容は，容易な刺激語（名詞，動詞，形容詞からなる93語）を用い，実験者が被験児一人ひとりに口頭で刺激語を言い，反応語を求める方法である。

被験児は，小平市にある幼稚園1園，保育園2園の協力を得て，3歳児95名，4歳児110名，5歳児100名，計305名のデータを得ることができた。

得られたデータは，すべてコンピュータ入力し，はじめにこのデータに基づく年齢間，性別間の諸種の比較検討を行い，次いで30年前に行った実験結果との比較を行う予定である。現在は，反応語のデータベース化の段階にあり，結果を報告するまでに至っていない。研究報告は，本学「紀要」あるいは他の機関紙に，資料や論文として掲載する予定である。

中学生の非行傾向行為のリスク要因：教師の視点からの検討

発達心理学　小保方　晶　子

中学校での問題行動の1つに非行があり，教師は日々対応に追われている。教師は学校現場で生